

韓国社会の理解と大韓民国の使命

パク チョン キュウ (2002博卒)

(11) 625事変②

今回は625事変の(日本では朝鮮戦争と言う)勃発について言及した。今回は終戦と戦争の意味、また連載のタイトルである大韓民国の使命について私なりの考え方を話して連載を終了したい。

1950年6月25日に起きた戦争はだんだん国際戦になった。26万人の中国軍が1950年10月から参戦し、またソ連の空軍も参戦した。それで、一方が戦争に勝つことが出来ない総戦力になり、1951年7月から終戦するための会談が始まった。だが李承晩(イ・スンマン)は終戦に反対した。625事変は世界の自由陣営と共産陣営との闘いであり、戦争に勝って韓国の統一を成し遂げる機会だと思った。また、戦争が終わっても米軍の太平洋防衛線に韓国が入っていないと同じ戦争が繰り返されると思った。それで、李承晩大統領は韓国軍だけでも戦争をするとアメリカを脅迫したり、あるいは韓国半島の戦略的な重要性を説得した。1953年6月に、結局アメリカは韓米相互防衛条約を締結すると決めた。1953年7月27日に休戦をした。

3年間の戦争で南北合わせて250万人が死亡し、全国土が破壊された。大きい悲劇だった。その時期の経験は後の韓国の経済発展の基礎となった。

① アメリカ軍と一緒に戦争をすることによって韓国の軍人の水準が高くなった。近代的な組織、経営方法を取得した軍人がリーダーシップを発揮



<1953年8月8日韓米相互防衛条約の仮調印式、李承晩大統領とダレス国務長官>

し1970年—80年の経済成長を成就した。

- ② 過去の世界、つまり朝鮮時代の階級関係が完全になくなった。
- ③ 銃と戦車を作る必要があり、軽工業だけではなく重化学工業まで発展させる必要があった。植民地になった国のなかで独立して車、船、鉄鋼の産業を興したのは韓国だけなのは625事変の経験が寄与している。
- ④ 共産党がどんなものかが経験によってわかるようになった。
- ⑤ 人口移動があった。韓国（南）から北韓へ行った人が10万人で、北韓から100万人以上の人韓国（南）へ入った。北韓へいった人は社会主義者、共産主義者であり、韓国（南）へ来た人は知識人とか資産家である。当時北韓の人口は1000万人ぐらいなので人口の1/10が韓国へ来たのだ。

625事変は悲劇だがその悲劇を克服しながら今の韓国がある。



<共産主義の国と韓国、そして、李承晩 大統領>

これまで、私は韓国の近代史を李承晩大統領を中心として話しました。李承晩大統領が偉い人であるのを私はある程度年を取ってから知った。連載の最初で乗せた図を再び見ましょう。世界はまだ我々が共有している自由民主主義ではなく個人の自由が抑圧される国に住んでいる。半島を逆に言うと半陸であり、韓国半島は韓国半陸でもある。韓国はユーラシアの端っこである国で李承晩大統領のおかげで自由民主主義を理念（IDEOLOGY）とする国になった。北韓は日本の軍国主義、ソ連のスターリン主義、中国の毛沢東主義、また朝鮮の朱子学を合わせた国になってしまった。韓国の使命はなんといっても赤くなっている国を青くし、全体主義から個人の自由を大事にする国になるようにするのではないかと思います。それが韓国の建国の理念であると僕は思う。

これまで、つまらない文章を読んでくれた方に感謝します。私はたまたま韓国半島は南北で理念（IDEOLOGY）として分かれていて、韓国の中でも目に見えない

線があり戦いつづけていると話しました。今回の事件でやっと線が見えるようになったと思います。今韓国に起きている事件も悲劇ではなくて、ひと段階韓国の水準が上がる転機になるように私は頑張りたいと思います。

事件については私の日本語版BLOGで掲載します。

<http://blog.goo.ne.jp/koreanowdays>

(おわり)



戦艦武蔵主機タービンについて (2)

(S42) 藤川 卓爾

3. タービン入口蒸気条件

(1) 蒸気条件の比較

艦名	1 缶発生馬力 SHP	蒸気圧力 kg/cm ²	蒸気温度 ℃	備考 (竣工年*)
戦艦大和	12, 500	25	325	16-12-16
航空母艦翔鶴	20, 000	30	360	16-8-8
航空母艦蒼龍	19, 000	22	300	12-12-29
駆逐艦陽炎	17, 340	30	350	14-11-6
駆逐艦朝潮	16, 700	20	300	12-8-31
水雷艇鴻	9, 500	30	350	
駆逐艦島風	25, 000	40	400	18-5-10

<出典> 「戦艦大和設計と建造」, pp36.

<*は 世界文化社, 「大日本帝国海軍主要艦艇 150」, (1996-8) >

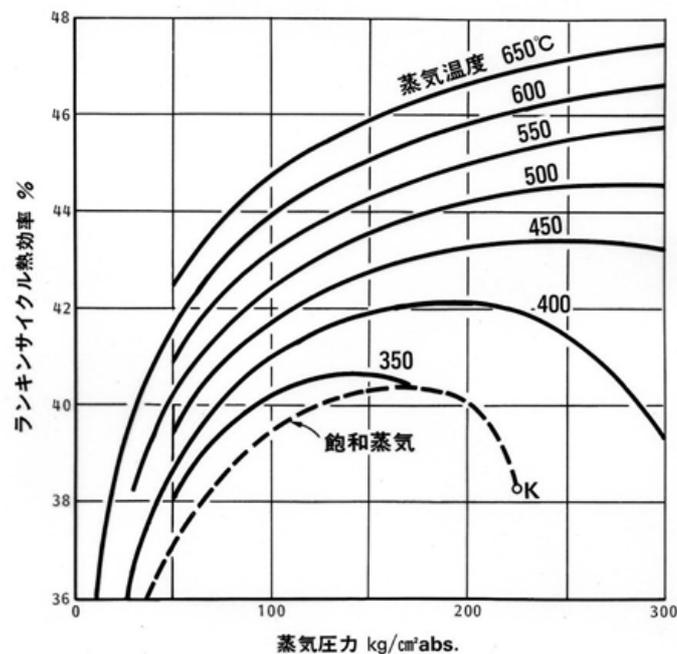
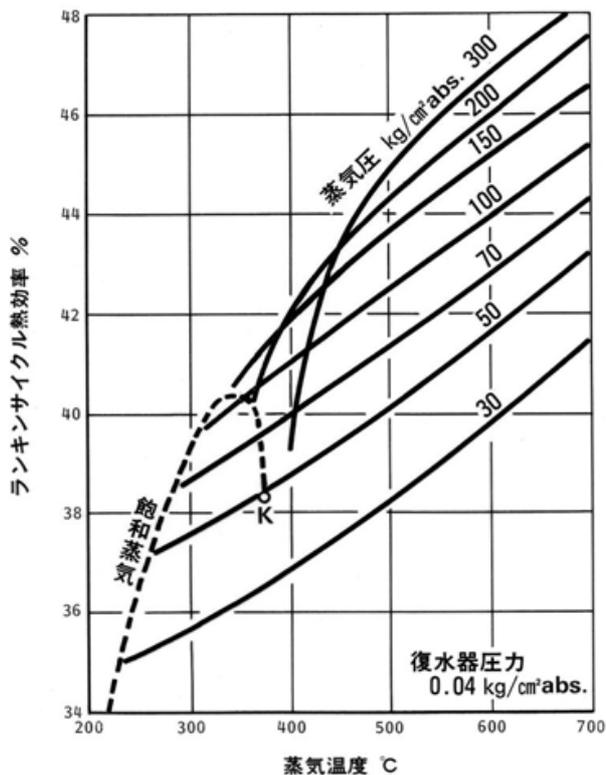
(2) 大和建造当時の艦艇の最高蒸気条件は30気圧×360℃(航空母艦翔鶴)、標準でも30気圧×350℃。(陸用では46気圧×460℃程度)

(3) これを1段階下げて25気圧×325℃にした理由は信頼性確保に万全を期したこと。

- ・本艦に対してとくに堅実主義がとられたからである。<「戦艦大和設計と建造」, p37.>
- ・昭和8年竣工の駆逐艦初春の1軸21,000馬力のタービンを2機併列して1軸とし37,500馬力に出力を低下したもの。<「戦艦武蔵建造記録」, p263.>
- ・新戦艦大和型2隻は、大切な虎の子戦艦としての見地から、30kg/cm²×350℃の一般の標準を下げて、25kg/cm²×325℃の蒸気条件を採用し、いやがうえにも安全を期した。<日本船用機関学会, 日本船用機関史編集委員会, 「日本の船用蒸気タービン発達史」, 日本船用機関学会誌, 第28巻, 第1号, p16. (1993-1)>
- ・「初春」型が選ばれたのは使用の結果、故障が少なく信頼性があると判明したからである。スチームの圧力25kg/cm²と蒸気温度325℃だった。本来なら圧力も温度ももっと高いのだが、機関をいたわって無理させぬよう努めたのである。<世界文化社, 「連合艦隊」, (2006-9), p119.>

(4) 蒸気条件低減による性能差ランキンサイクル理論熱効率の比較

蒸気条件	圧力 kg/cm ²	温度 ℃	理論熱効率	比較 %	排気圧力 Kg/cm ² abs.
標準	30	350	36.2	Base	0.04
大和型	25	325	34.8	-3.62	0.04



蒸気条件と熱効率(上 : 30kg/cm² × 350°C、下 : 25kg/cm² × 325°C)

相対的に約3.6%熱効率が低下するが、それを犠牲にして信頼性を重視した。

<参考文献>

牧野 茂/古賀 繁一監修, 「戦艦武蔵建造記録」刊行委員会編著,

「戦艦武蔵建造記録」, アテネ書房, (1994-10), pp91-92. >

などなど

“思いの入った、量産技能、技術、”とは

1968年卒 加藤 健治（元平研、大谷研）

その1. 未然防止

先日、テレビのインタビュー番組で、染の職人さんが“手染めをなぜやられているか”の質問に“手染めは大量生産に比べて、”思い“が入っている。”と答えられていました。大量生産とは思いが入っていないように見えるのかなと感じました。良い製品をつくるという、思いで量産に取り組んでまいりましたが、思いの入った量産の技、技能とは何か、考えました。

まず、第一に未然防止です。

畑村洋太郎先生の“失敗に学ぶものづくり”という著書⁽¹⁾の“おわりに”の項に次のように書かれています。“そしてもうひとつ、本書を通して見えてくるのは、[仮想演習]の大切さということです。自分の目の前に見えていることだけを問題にして検討してはいけません。自分が仕事をすることで起こることを社会的な影響を含めて頭の中で仮想演習しないと、ちゃんとしたものづくりはできないということが、それぞれの章の背景としてあげられていると思います。失敗をいたずらに恐れる態度は、逆に失敗に対する思考停止しか生まず、結果的に大きな失敗につながります。・・・一方つねに失敗したらどうなるかという仮想演習を行うことによって、何か失敗が起こったとしても、その失敗を最小限に食い止めることができるようになります。”（注1）その通りと考えます。

もう一つ、大切なことがあります。もの造りの現場では、自分たち自身で考え、全員が納得でき、継続的に全員が実行できる方法であることです。そのためには、人から与えられたものでなく自分たちで考え、自分たち主体で対策し、失敗したら、修正し、蓄積し、常に残る形にし、新しい人にも継続できるようにして、その現場の工程、作業として継続して生かされていかねばなりません。自分たち流に各社、各工場考えたものが“QAネットワーク”とか“保証の網”とか名付けられ、未然防止に使われています。（例：注2）

自工程完結の考えのもとで、設計は製品設計の立場でFMEA（Failure Mode Experimental Analysis）を、生産技術（工程設計）は工程の眼で工程FMEAを、製造は

“工程と作業の眼で仮想演習をせねばなりません。製造では、全員が、自分が主役で仮想演習を行い、継続的に行えるものではなく、（引き継がれていけるもの）なりません。製造の立場で全員がやる気を持って実施できる方法を、各会社工夫して考えられています。全体の工程の中で自分の工程の位置づけ、自分が失敗したらどうなるか、となりの工程とのかかわりなど、チームワークの形成の一つになります。歴代のノーハウが入って受け継がれて、蓄積されていきます。作業標準は自分たちでつくり、いつでも改善できるようにされているように、QAネットワークにより、どのように品質を造りこむかを蓄積できるようにしています。

さらに、量産では、立ち上がり最初から良品をスムーズな流れでつくらねばなりません。（立ち上がり新製品は量を必要とするのが常です。）立ち上がり前の、トライ（実際の演習）での全員での観察と検証と対策、立ち上がりから100%同じ良品をつくる思いと緊張は逆に量産の大変さ、思いは込められていると思います。

100%同じ良品を造ろうとする思いは、見えるものではないのですが、製品には眼に見えない形で入っていると思います。（チームワーク、育成、管理は次の機会（その2）に述べたいと思います）

注1：“失敗に学ぶものづくり” 畑村洋太郎 著

注2：“デソ-ものづくりDNAの心と考動” 真弓篤 著

ラマ島 (Lamma)

檜原勇多賀 (S 3 7 卒)

ラマ (LAMMA) 島は、香港島からたった3キロメートルしか離れていない人口8,500人の小さな島である。外国人にはまだあまり知られていないが、キャンプ場やバーベキュー場などの施設が整い、最近では香港島からのハイカーで賑わっている。

1983年11月にラマ島を訪れた頃はまだ観光客も少なく、静かでのんびりした離れ島の趣を留めていた。ラマ島には、香港島からフェリーで40分で着く。フェリーは、Hong Kong and Yaumati Ferry Company によって運航されている。船の煙突にHYF と大きく書かれているので直ぐ判る。フェリーの船着き場は、Outlying Districts Services Pier (離島線埠頭) と Central Harbour Service Pier (港内線埠頭) の二つがあるが、ラマ島行きのフェリーはOutlying Districts Services Pier から出る。場所は、Star Ferry (天星埠頭) から西に歩いて5分のところ、『干諾道中通り』の International Building の向かいに位置する。

ラマ島行きのフェリーには、『容樹湾』行きと『索古湾』行きとがある。目的地のラマ発電所は容樹湾の近くにあるので、容樹湾行きに乗る。容樹湾は、ラマ島で一番大きな町である。とは言っても、日本の漁村程度の大きさである。船着き場から町を抜けるまでの狭い路の両側には沢山の店が建ち並んでいて、干し魚、アミのペースト、中国ハーブ、漢方薬、香料、ローソクなどを売っている。このアミのペーストは、アミを発酵させて作った調味料だが、その臭いがたまらない。魚の腐った臭いが町中を漂っている。ラマ島には車は一台もない。路が狭いので、車を持ってきても走れるところが無いのだ。従って、安心して道路の真ん中を歩ける。



レストランは、容樹湾通りに数件固まって建っている。Man Fung Restaurant (民豊酒家)、Lung Wah Restaurant (龍華酒家)、Capital Restaurant (首都餐

庁)、The Lantern Society (南Y燈社) などがある。数日滞在すれば、一通り全部のレストランで食事できる。このなかでは、龍華酒家が郷土色豊かな色々な料理を食べさせてくれて、味の方も満足できた。島の人達も、良くこのレストランで食事していた。2週間の滞在期間中、朝食は首都餐厅で、夕食は龍華酒家で撮ることが多かった。この龍華酒家に、『虫見 虫介』という貝の塩辛が置いてあって、おじや風の魚介類スープにこの貝の塩辛を入れるとなかなか美味しかった。この塩辛を買って帰ろうと思って、筆談で聞いてみたが、夕方香港島に行かなければ売っていないらしい。



町を抜けたところで左に折れて、石の階段を50段くらい登ったところに、『文麗華別野』というホテルがある。見晴らしが良く、割と綺麗なホテルである。ホテルの部屋でテレビを観ていた。中国語の放送の他に、英語の放送もある。チャンネルを廻していると、漫画の「アラレちゃん」が映った。画面は日本のものだが、セリフは中国語に振り替えている。中国語の「アラレちゃん」は何か変である。笑い声だけは、そのままである。そのうち画面の中に、「のりまき研究所」という看板が出てきた。画面の中の日本語は、どうしようもなかったのだろう。

散歩に出た。ホテルの裏手の路を更に登って行くと、小さな学校があった。この島の小学校であろう。大きさは、日本の保育園程度である。運動場は、100坪くらいしかない。教室を覗いてみる。日本の小学校と同じように、壁に生徒の書いたクレヨン画が一面に貼られている。窓ガラスに顔をくっつけてよく見ると、生徒の絵の上に、大きな字で書かれた標語が目に入った。その標語は、「質実剛健 国家繁栄」と大書されていた。

小学校から急な坂道を降りて行くと、路の両側は野菜畑である。このラマ島から、かなりの量の野菜が香港島に送られていると聞いた。畑では、若い娘さんが水を撒いている。その姿は、大変印象的だった。肩には天秤棒を担いでいる。この天秤棒は竹製である。大きな孟宗竹を小さく割って節を落としたものを裏返しにし、両端の節は残して、ここに桶のひもを引っかけている。桶の下部にはじょうごがくっついていて、ここから水が噴出する仕掛けである。その娘さんは、畦と畦の間を黙々と往復している。肩には、竹の天秤棒が食い込んでいた。

いよいよ島を離れる日、フェリーの時間までにまだ3時間もあったので、地図を見て登ってみたいと思っていた島の中央部の山に登ってみることにした。あいにく運動靴を持ってきていなかったので、仕方なく革靴で登ることにした。路は山の斜面に沿ってなだらかに登っているが、大きな石がゴロゴロしていて、大層に歩きにくい。途中で路が二つに分かれている。はじめは下の方の道に進んだが、どうも目的地からだんだん離れて行くような気がして、また分岐点まで引き返して、上の方の路を登った。あとで判った



ことだが、この二つの路は、結局先で合流していた。左手に山の頂を望み、右手下に海を見ながら、路は、だらだらと登って行く。およそ1時間も登った頃、やっと、山の峰にたどり着いた。その瞬間の光景が、今もくっきりと網膜に焼き付いている。目の

前には、信じられない光景が広がっていた。今まで続いていた足下の地面が、突然無くなり、足下には、切り立った断崖があった。そして、その断崖の下に、大きな湾と、町並みが静かな佇まいを見せていた。突然の光景の変化に、思わず息をのんでしまった。そして暫くの間、我を忘れて、その光景に目を奪われていた。それは、衝撃的でさえあった。あとで判ったことだが、その湾と町並みは、ラマ島で二番目に大きな索古湾であった。

